
プリズム

薙澤由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 プリズム

【Nコード】
N3055P

【作者名】
薙澤由真

【あらすじ】
ある高校に通う二年生の男子生徒―千里。
苦労性の彼が朝の恒例行事で疲れていると、クラスメートの梨香との会話が中学時代の話になった。
中学時代にトラウマを持つ彼が、当時の夢を見てしまい気分は落ち込む一方。
今回はそんな彼の、中学時代のお話です。

俺の昔の人間関係（前書き）

この小説に登場する団体・地名などはフィクションです。

同じ名前の団体や地名が存在するかもしれませんが、そこの繋がりは一切ありません。

一部作中に同性愛を思わす表現が含まれる場合がありますが、本作はそういったジャンルではありません。苦手な方はお気を付け下さい。

俺の昔の人間関係

目の前で、とても爽やかな笑みを浮かべた青年が、これまた爽やかな笑みを浮かべている青年を足蹴あしげにしていたら…皆さんどう思いますか？

学校に着いてすぐの事。

登校する生徒達で溢れている校門の前で、その光景は広がっていた。

美形と言う名のイケメンと称される青年が、美人と言う名のイケメンと称される青年を踏みつけて爽やかに笑ってこちらに手を振っている。踏みつけられている方の青年も爽やかな笑みを浮かべており、それは隠す事のない悦びを表していた。一言で言うところ『シユール』。

そんな光景に、千里せんりは溜息を吐いた。

「あの、朝からそんなSMチックなの……見たくないんですけど。」
見慣れている彼にとって、目の前の光景を受け流す事は容易いが、毎度毎度目の当たりすると溜息しか出なくなるのも仕方ない。

進級して然程経さほどっていない四月の中旬、見慣れている二・三年生はともかく入学したての一年生には驚きを隠せない光景であろう。
順応性が高い子なら見慣れたかのように素通りする者も居るだろうが、殆どが毎朝毎度驚いて立ち止まっている者達だ。とは言え、毎朝と言う程日数も経っていないのだが。

「ああ、ごめんね。毎度毎度、コイツが気持ち悪くてさ。つい蹴っちゃうんだけど、逆に悦ぶから手に負えないんだよね。」

先程から寸分違わぬ爽やかな笑みで言っただけの彼。

だがその言動には何処か黒いものを感じるのは、およそ気のせいではない。それに千里も気付いているようで、目の前で笑う青年に気付かれないようにそつと息を吐いた。

「だってさ、綾坂あやさかの蹴り最高に気持ちいいだもん！」

それは、騒がしかった校門前を一瞬で静寂にする言葉だった。

そしてその静寂を破った音は、綾坂と呼ばれた青年が爆弾発言をした青年を容赦なく蹴り飛ばした打撃音だった。

千里はその光景から目を逸らして、朝から疲れたと言わんばかりに大きな大きな溜息を吐きそつとその場から離れ一人校舎に入ってしまった。

二年の教室に着いてからも、千里は疲れたように溜息を吐いていた。

その様子にクラスメートの何人かが気付くも、ああまたか。と言わんばかりにすぐに友人達との話に戻る。

それは今の彼に何を言っただけで、逆に千里を疲れさせるだけだと昨年から学んでいるクラスメートの配慮であった。

千里の学校にはクラス替えという制度がない。

よっぽどの理由がない限りは、高校卒業までの三年間を同じクラ

スメート達と過ごす事になる。

（ただし移動教室や選択授業が多いので、他クラスとも広く友好関係を持っている生徒が殆どだ。）

なので一年生の内にクラスメートの性格や人間性なんかは把握出来てしまい、二年生からは昨年の経験を生かして行動出来る訳である。

クラスメートの配慮のおかげで一人朝の疲れを癒していると、前に座っていた女子が振り返り千里の頭を軽く叩いた。

「ちよつとちよつと。溜息自重してくれない？こつちまで幸せ逃げそうじゃん。」

「うるせーな。なんかもう、綾坂先輩と谷塚先輩たにつかのやり取りは精神的に疲れるんだよ。」

「いや、分かるけどさ。あの二人強烈だし、私谷塚先輩と同じ中学出身だし。」

「あー、そういえば梨香りかって中学時代に部活で谷塚先輩に世話になったんだっけ？」

思い出したように机から顔を上げ、頬杖を突いて千里は梨香に問う。

「うん。私が女テニで、谷塚先輩が男テニだったの。あの頃からちよつとMっぽい気はしてたんだけど、まさかここまでのドドMとは思わなかったな…。」

若干遠い目で苦笑しながらも、梨香は懐かしそうに話していた。

千里は谷塚と梨香と別の中学出身の為当時の二人の事はあまり詳しく知らないが、梨香にとってとても楽しくて充実した中学時代だったのだろうと察する。

「そういう千里はさ、確か綾坂先輩と同じ中学出身だったよね？」

「っ……まあ。」

途端にビクリと肩を揺らし、明らかに嫌そうに視線をゆっくり泳

がせる千里。

目の前のクラスメートの様子を不審がった梨香は、グツと身体を乗り出して千里に顔を近付けた。

突然近くにやって来た梨香の顔に特に驚く事はしなかったが、居心地悪そうに目を逸らす姿に彼女は余計に不審がった。

そのまま梨香は問いただそうとしたが、彼女にとってはタイミング悪く、千里にとってはナイスタイミングで担任教師が教室に入ってくる。

「ほら席に着けー。出席取るぞー。」

「…ゲ、もうそんな時間？」

「ほら、早く自分の席に戻れよ。」

仕方なく自分の席に戻る梨香は、ホツとしたように笑う千里を目撃して更に疑問に思う。

しかし担任が出席を取り始めたので、諦めて前を向いて名前を呼ばれるのを待った。

梨香が前を向いたのを確認して、千里は周りにバレないように小さく安堵の息を吐いた。

そのまま担任の出欠を取る声を聞きながら、彼は視線を窓の外に向けた。

俺の昔の人間関係（後書き）

此処まで読んで頂きありがとうございます。

まだまだ未熟故に読み難い文章や誤字脱字があるかと思いますが、
そういった部分を見つけた場合は一言でも教えて下さると幸いです。
これからも頑張っていきますので、応援よろしくお願い致します。

02（前書き）

この小説に登場する団体・地名などはフィクションです。

同じ名前の団体や地名が存在するかもしれませんが、そこの繋がりは一切ありません。

一部作中に同性愛を思わす表現が含まれる場合がありますが、本作はそういったジャンルではありません。苦手な方はお気を付け下さい。

窓側の後ろの方の席。一番後ろではないにしろ、クラス内で一番のベストポジションと呼ばれるそこは千里せんりに席だ。

授業中よく窓の外をボンヤリ眺めたり、午後の授業の時は暖かい日差しに当たりながら昼寝をしたりとするのに丁度良い席。

教師から見えない位置という訳ではないが、真ん中の席などに比べたら十分居心地の良い席である。現に千里以外の窓側の席の生徒は、殆ど寝ている。

真面目に授業を受けている者もいるが、午後の授業ともなると満腹感と暖かい日差しに眠気を誘われ負ける生徒が増える。

今は古典の時間。寝ている生徒数が最も多い授業だ。

何故そんなに寝ている生徒が多いのかと言えば、原因は担当教師さかしたの阪下という先生にあった。

彼はだいぶお歳を召しており、特有のゆったりとした性格と口調故に生徒達からしてみれば子守唄を歌われているようなものなのである。何より彼は寝ている生徒を起こすような真似をしない。

まるで昔話をするかのような、ゆったりとした静かな授業。生徒が寝ない筈がないのだ。

勿論、千里もぐっすり夢の中である。

「この和歌は、作者の恋物語を詠うたっているものなんですね。」
大抵の授業はしっかり起きている優等生の梨香りかですら、今は気持ち良さそうに夢の中である。

クラス内で起きている生徒の殆どは、進路で古典が必要になってくる者達だ。それ以外は友達と話したり、こっそり携帯を弄ったりしている。

暖かな日差しと、心地良い風が入る昼下がりの午後。
そんな眠るのい最適な午後の授業で一人だけ、千里だけが眉間に皺を寄せて寝苦しそうにしていた。

須賀原中学

俺が通っていた中学だ。
今思い出しても腹立たしい。何より気持ち悪くて屈辱的なイジメのような中学生活の始まりは、俺が中学に入学したその日に起こった。

その日俺は入学式の後、帰ろうとしていたんだ。帰ろうとしていたんだが、帰れなかったんだ。

何故って？

そんなの簡単だ。俺が、極度の『方向音痴』だからだ。

「マジありえねー。普通学校で迷子になるか？いや、小学生の時も3年生まで迷子だったけどさ。家に帰る道でも迷子になるからって、姉貴と一緒に帰ってた事もあったけどさ。ちっさい頃なんか、商店街やらデパート内では常に誰かと手繋いでたくらいだけどさ。あれ？なんか自分で言ってる悲しくなってきた。俺だしぶ残念な子じゃん。」

こんな事になるなら、一樹いつきと一緒に帰るんだっただけ。何でアイツ、こういう日から部活見学するとか言うんだ？てか何で入学式当日まで部活やってんだよ。

そんなに此処ってスポーツ有名な中学だったのか？俺も入るなら

バスケ部って決めてるけど、さすがに入学初日から見学しようなんて思わねーぞ。

本当にアイツ、サッカー好きだよな。

なんて、ボンヤリ歩いてたのがいけなかった。いつの間にか体育館裏っぽい所に立っていた。

おかしいよな？さっきまで校舎内だったよな？いつの間に外に出てたんだ。

取り敢えず校舎内入って、せめて上履きから靴に履き替えないといけない。やっぱりボンヤリ歩いてるんじゃないかった。

いくら俺でも出口の分からない迷子なんて、この歳でする筈がない。俺が分からなかったのは、下駄箱の場所だ。教室を出てからずっと下駄箱を探していたんだが、何故だか見つからない。これはある意味奇跡だよな。

俺って実は呪われてる？

なんて、思ってる場合ではないようです。

「この学校って、治安悪かったん…ですか？」

「んー？そんな事ないよ？」

どうして？と、目の前で何十人も不良の山の上に立ち爽やかに笑うこの人。

いや、貴方自分の姿を見て下さいよ。その足元の大量の不良達を視界に入れて下さいよ。

なんて言える筈もなく、ただポカーンと立っている俺。そんな俺を観察するように見つめる、目の前の先輩と思われる人物。

この人こそが、俺の中学校生活に災厄を齎した人物――綾坂先輩だ。ただ、俺はこの時綾坂先輩の事をよく知らなくて、この笑顔の裏についてよく知ろうとしなかった。

胡散臭いとは思っていたけど、まさか、この人があんな人だった

なんて……

「キミ、新入生かな？俺は綾坂。よろしくね、新入生くん。」

02（後書き）

長さの模索中です。

話を書いた後に、「どこで切りや良いんじゃああ！！」とキレる事はいつもの事です。

自分で書いててコレです。はい。

感想を切実にお待ちしております！感想を送って頂ければ、更新頑張れそうです。よろしく願いします、切実に！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3055p/>

プリズム

2010年12月5日03時48分発行